

Emily Dickinson の詩を教室で読む

その実践方法と今後の課題

金澤淳子

はじめに

一篇の詩を 1 回の授業で読むとしたらどのような方法があり得るだろうか。作品は 19 世紀アメリカの詩人 Emily Dickinson の詩であり、英語の詩を初めて読む学生がほとんどというクラスである。「英語」で書かれた詩に向き合い、試行錯誤を重ねながら、受講生の語学力と想像力を駆使して取り組みながら詩の理解を深めることを目指す。自分の言葉で自分の考えを伝え合い、お互いのやりとりを積み重ね、右往左往しながら詩に向き合うような場を、どのように作っていくことができるだろうか——以下は、東京都内の私立大学で非常勤講師として担当した文学部英文科 2 年生必修の演習クラスでの取り組みの報告となる。

Emily Dickinson の詩と Plain Style

19 世紀アメリカの詩人エミリー・ディキンソン(1830-86)はアメリカ北東部のニューイングランド地方に生まれ、生涯で 1800 篇ほどの詩を残した。生存中に活字になった詩は 10 篇のみ。すべて匿名であり、詩集は死後出版になる。ディキンソンの詩の特徴は、ニューイングランドのピューリタニズムの流れを汲む“plain style”と呼ばれる文体にあるとされる。プリンストン大学出版 *Encyclopedia of Poetry and Poetics* では“plain style”の定義は難しいとしながらも「明確で、単純で、素朴で、機能的で、直接的で、簡潔」を指摘する (Graham 1040)。ディキンソンの詩の「文法」を一冊にまとめた Cristanne Miller もこの特徴に言及し、寡黙な表現、間接的な表現の中に慣例や伝統に抗う姿勢を解釈する (145)。ダッシュによって生じる間をどう解釈するか。省略され、切りつめた言葉から生じる余白や曖昧さをどう解釈するかがディキンソンの詩の難しさであり、大きな魅力でもある。

授業の流れと実践方法

授業は三段階構成 (担当者の発表、ディスカッション、教員によるまとめ) で進めた。授業開始直後に予習ペーパーを回収し、予習段階での気づきや疑問をクラスで共有し、担当学生の発表 (毎回 3 人が各自ハンドアウトを準備) および学生同士の話し合いを経て、最後に教員が補充説明をする。授業後のリアクションペーパーの質問は、翌週の授業冒頭で取り上げ、復習も兼ねる。ここでは第 2 回と第 7 回の授業を中心に報告する。

第 2 回目の授業では“Some keep the Sabbath going to Church -” (F236)を選んだ。単語や文法構造がそれほど難しくなく、詩の基本的な用法を説明することも念頭に置いた。1861 年頃にディキンソンが清書し、自信作のひとつといえる。ディキンソンの詩は他人に送った詩と、誰にも送らずに手元に置いた詩のふたつに大別することができるが、この詩は 1861 年頃、文芸批評家 T. W. Higginson に送った他、別の知人にも送ったらしく南北戦争中の 1864 年 3 月 12 日に北軍系新聞 (*The Round Table*) に匿名で掲載され、ディキンソン「紹介」に相応しい詩といえる。

まず予習段階での気づきや疑問を共有する場では、ダッシュの多用、大文字の使い方、代名詞“my”と“our”の使い分けの疑問、“s”で始まる語が多いことなどが挙げられた。構成については、教会と自然の対比構造が挙がる。内容に踏み込んだ疑問には、なぜ語り手は教会に行かないのか、“Wings”とは何か等が出た。特に多かった疑問は、最終連“*I'm going, all along*”の解釈の仕方であり、一体どこに向かっているのかわからないというものだった。注目点や気づき、疑問が共有されると、詩の輪郭がある程度浮かび上がってくる。

担当者は①自分なりの発表タイトル、②注目したい単語、③気になる表現 ④論点 (注目点、疑問点、クラスメートへの質問)、⑤発表者自身はこの詩をどう捉えるかなどの 5 項目をハンドアウトにまとめてもらう。この回では教員が発表を担当した。私のハンドアウトでは①は「静かなる反逆」、②は教会関係の用語を選び、ディキンソンが使用した辞書の定義を示した。彼女が“my only companion” (L261)と言及した Noah Webster の *American Dictionary of the English Language* である。“bobolink”については、Marta Werner がディキンソンの詩に登場する鳥の啼き声を集めて編集した“Dickinson's Birds” <<https://dickinsonsbirds.org/project>>にて聴かせた。

詩の用語 (“stanza”「連」、「dash」「ダッシュ」)などの確認や、“s”の音への注目もあったので“alliteration”「頭韻」についても確認。さらに詩の形式にも触れて、「繰り返し+ヴァリエーション」の形 (Repetition + Variation) による「対比の構造」に注目を促した。冒頭で疑問として挙げられていた最終 2 行の解釈を考えるうえでも、この「繰り返し」の形式は有効だ。讚美歌の韻律 (common meter) に基づき、内容としては教会に行かずに自分なりの安息日の過ごし方を歌っており、形式と内容との相反がある。最終 2 行 (“So instead of getting to Heaven at last - / I'm going, all along.”) に注目し、他の人々が天国を目指すのとは異なり、現在進行形で自分なりの道を進み続ける姿に慣例への反逆を解釈して提示した。

授業後のリアクションペーパーには文法的な疑問も寄せられ、“for”の訳し方 (～の代わりに) を学び、対の構造がみえて

きたこと、“a noted clergyman”と“God”を同格として理解できたこと、“noted”を動詞の過去形として文法ミスをして「神が名高い聖職者に説教した」と誤訳したことなどが並ぶ。また、詩の解釈に関連した興味深い疑問として、第2連の“our little Sexton”ではなぜ“my”ではなく“our”なのか、さらに第3連の“so”を接続詞「だから」(therefore)として解釈するとその前の部分とうまく繋がらないという疑問が寄せられた。また一篇の詩全体の感想として「天気は絶対晴れだし、季節は長袖着てる春か秋を想像してる。匂いは太陽に照らされてる時の芝生の匂い」という感想、「語り手がこの考えに至るまでにどんな過去があったのか、どんな思いで人と違う信仰を選んだのか詩に表れていないところまで想像した」というコメントがあった。また「作者についての情報は大切」でありながらも「その人の情報を知っていることで先入観に飲まれてしまう」ことの難しさを指摘する声もあった。授業での情報提供の仕方については私自身が常に抱える問題でもある。

第7回目の授業では“Under the Light, yet under,”(F1068)を取り上げた。単語自体はそれほど難しくなく、一見読みやすそうに見える。初回に扱った“Some keep the Sabbath going to Church-”(F236)の詩とは別の意味で、反復の特徴があり、応用編として読んで欲しいのと、先行研究があまりないので自力で考えて挑戦してもらいたいと思ったこと、語り手“T”が登場せず、様々な場面が想定可能であることがその理由である。

授業冒頭の学生からのコメントでは、自然に関する語彙が多い、距離や長さを表わす表現が多い、リズムは一定しているが韻は踏んでいない、“Disc”とは何か、“Comet’s Chimney”や“oh for~”とは何か、などの疑問が挙がった。構成については、第2回の授業の「反復」の応用編として、第1連と第3連の対比の構造、人工物と自然物の対比が挙がる。詩の主題の展開については、“Under” “Over” “Further” 頭韻(Disc, Distance, Dead)の反復によって連が進むにつれて思考の幅を広がるとの指摘があった。また、生と死の間の距離、物理的・時間的な距離にとてつもない隔たりあることなどが次々と挙がり、一筋縄ではいかぬ詩でありながらも、受講生たちからの疑問や指摘によって、詩全体が立ち現れたのが印象的であった。

次に3人の担当者が発表し、それぞれが掲げた発表タイトルは、A:「死」、B:「灯の下で」、C:「表裏一体」であった。特に“Disc”の解釈をめぐる各自の考察が並び、天使の輪の例えとするもの、具体的な物を表すのではなく、概念的なものとする解釈などの報告があった。え教員からの補足説明では項では第2連の“Arm could stretch/Were it Giant long;”における仮定法“could”の用法について、“oh for~”は「～があればいいなあ」の願望の解釈を伝えた。最も質問が集中した“Disc”については、先述のウェブスター辞書の定義“The face or breadth of the sun or moon; also, the width of the aperture of a telescope glass.”を紹介し、併せて Amherst College Museum of Natural History で入手した資料からディキンソンの父 Edward が 1840 年代にアマスト大学天文台に 500ドルの寄付をした事実を提示。またイギリスの天文学者 Frederick William Herschel (1738-1822) の名がディキンソンの他の詩(Fr803)に登場することも踏まえ、最終2行“oh for a Disc to the Distance/between Ourselves and the Dead!”を、この世からあの世への隔たりを埋める望遠鏡レンズがあれば良いのに、という願望として解釈した。

授業後のリアクションペーパーでは、簡単な構成であるものの詩の意味をとるのが難解だったとの声があった。「詩を読んで、意味を予想し、予想した意味で合うような根拠を探す読み方をしていることに気が付いたので、ひとつの解釈にとらわれず、他にどのように解釈できるのか検討したい」とのコメントもあった。また「ウェブスター辞書を使用することの重要性を認識できた。今回は完敗だったので次回の詩はもっと詩に寄り添えるよう頑張りたい」というコメントもあった。詩の解釈については「繰り返しの表現を用いて第1連から第4連にかけての語り手と読み手の思考の幅を広げる効果を生み出している」との気づきもあった。「ディキンソンの詩を理解するには、空想や妄想、想像力だけではなく、その時代についてのリサーチ力が大切であることに気がついた」という冷静な声もあった。

まとめ

受講生たちが予習、授業冒頭、発表、ディスカッションなど、いくつかの段階を経ながら英語の詩の理解や読みを深めてもらうことを目指した14回であった。1回の授業(100分)に1篇の詩のペースで進めたため、いささか断片的な進行になってしまった嫌いがある。また様々な意見をお互いに共有する場を目指したため、ひとりの声(意見)が埋もれてしまったともいえる。私自身にとっての一番の課題は、先述したように、詩人についての情報の出し方である。30代の頃から親しい人々以外と会うのを避けるようになっていった詩人の伝記的な情報が独り歩きして、詩の解釈に影響してしまうことを避けるべきか、また語り手は必ずしも詩人ではなく、“a supposed person”(L268)である可能性など、どこまで学生に伝えるべきか、常に試行錯誤を経ながらの14回でもあった。

Dickinson, Emily. *The Poems of Emily Dickinson*. 3 vols. Edited by R. W. Franklin, Belknap Press of Harvard UP, 1998.

---. *The Letters of Emily Dickinson*. 3 vols. Ed. Thomas H. Johnson and Theodora Ward, Belknap Press of Harvard UP, 1958.

Miller, Cristanne. *Emily Dickinson: A Poet’s Grammar*, Harvard UP, 1987.

Graham, K. J. E. “Plain Style.” *Princeton Encyclopedia of Poetry and Poetics*, edited by Roland, Greene and Stephen Cushman, Princeton UP, 2012, pp. 1040-1041.

Webster, Noah. *American Dictionary of English Language*. 2 vols. New York S. converse, 1928.